

日本人の「待ち心」今昔 (7)

武井勇四郎

- 序
- 第一章 「垣間見」の日本の風土 …… (以上, 第 33 卷第 2 号)
- 第二章 日本人の「待ち心」の原風景 …… (以上, 第 33 卷第 3 号)
- 第三章 『枕草子』の待つものの品々と
斎藤徳元の『尤之双紙』 …… (以上, 第 33 卷第 4 号)
- 第四章 「待つ間」の美意識——兼好法師 …… (以上, 第 34 卷第 1 号)
- 第五章 今も昔も変わらぬ「来迎待ち」 …… (以上, 第 34 卷第 2 号)
- 第六章 出逢い待ちと垣間見の展観美 …… (以上, 前号)
- 第七章 閑話——「待つ間」さまざま——休題
- 一節 「待つ間」は語りの額縁——『大鏡』
- 二節 「待屈の間」のお喋り——『浮世床』
- 三節 「待つ間」の江戸笑い話——『本朝二十不孝』
…… (以上, 本号)
- 第八章 情念の「待ち心」と夢幻能
- 一節 日本の風景と意景——「松」と「待つ」
- 二節 仏心感応の「夢告げ待ち」の利生譚
- 三節 「夢告げ待て」——夢幻能「忠度」
- 四節 情念の「待ち心」へ

第七章 閑話——「待つ間」さまざま——休題

一節 「待つ間」は語りの額縁——『大鏡』

次の四話はいずれも、待ち手があることを「待つ間」にそれとは別の事件が闖入(ちんにゆう)して、それが本筋になり、本来の待つことの意義が失わ

れ、「待つ間」はその事件の話の額縁にすぎなくなる。

一話：「待つ間」の大善知識

〈昔、富豪の須達（しゅだつ）長者は、一生のうちに七度は富み、七度は貧しくなった。最後に素寒貧となったときの貧苦は先の六倍にも増した。つまり、牛に着せるほどの粗末な服もなく、菜葉ばかりの粗食でこれといった味わいもなかった。夫妻は互いに嘆き昼夜を送っていた。縁者からも近所の者からも同情を得られず嫌われて、丸三日も食べずにいた。そこで、もとの蔵に入ってみると、白檀の升が片隅にあった。これを須達は市に持って行って売り、それで米五升を買った。とりあえず、米一升で菜葉を買った。

須達の妻は米一升を炊いて夫を待つ間、仏のお弟子の解空（げくう）第一の須菩提（しゅぼだい）が来て托鉢した。妻は鉢をとって一粒残らず供養した。

また米一升を炊いて夫を待つ間、今度は、神通（じんつう）第一のお弟子の目連（もくれん）が来て食を求めた。先のように供養した。

また米一升を炊いて夫を待つ間、多聞（たもん）第一のお弟子、阿難（あなん）が来て食を求めたので、前のようにした。

妻独り思うに、

「今は残り一升になってしまった。精米して、炊いて夫婦で食べよう。今後、どんなお弟子が来られても敢えて供養はしまい。まず、自分らの命を継なごう。」

そう思ってすでに炊いていたが、夫の須達が帰って来ないうちに、大師尺尊（=釈迦）が自らおいでになって托鉢を乞う。妻は随喜の涙を拭って、礼拝し、供養した。

その時、釈迦はその女のために偈（げ）をお説きになる――

「貧窮にして布施すること難し。富貴にして忍辱（にんにく）なること難

し。厄(やく)嶮にして持戒すること難し。少壮にして欲を捨つること難し」と。

こう説いて釈迦はお帰りになった。

しばらくして須達が帰って来た。妻はこれまでのことを一部始終語った。

夫の言うに、

「おまえは、私のために未来永劫の大善知識(=私の教えを説き、善導をしてくれる師)となった」

と言って、妻を礼拝して限りなく喜悅した。

よって、その日、その時より三百七十の倉が元のごとくに七宝に満ちた。このたびの富貴は、前の六倍にも増した。永代に名を挙げて、住んでいる国の類なき長者になった。〉(岩波新版『注好選』pp.303)

これは、説話集『注好選』(12世紀初頭)に「須達は市に詣(いた)りて升を売る」として載る一話である。

妻が貴重な升を売って米に替え、ご飯を炊いて夫の帰りを待っている。その「待つ間」に須菩提、目連、阿難といった釈迦の高弟が食を乞いに次々と来る。最後に釈迦まで托鉢に来る。本来とは別の出来事が次々と割り込んで来て、それが話の本筋となり、「待つ間」を埋め尽くす。

「貧窮にして布施すること難し。富貴にして忍辱なること難し。」と説く釈迦の偈を乗り越えることが主眼となり、妻は四回同じ試練を受ける。「待つ間」は「試練の間」に変わる仏教説話である。

後の『今昔物語』(巻1-31)の天竺編では、「須達長者、祇園精舎を造ること」の表題に変え、後日譚を付け足し、この長者が土地を買い取り、伽藍を建立し、仏殿に仏像を据え、祇園精舎の園林を造成し、供養した、と結ぶ。それも、もとをただせば妻の善知識がもとであると説かれている(岩波新版『今昔物語』(→) p.86)。

二話：朝成、暑熱の中を半日待たされて怨霊となる——『大鏡』

（朝成（あさなり）の中納言と一条摂政とは、かつては、同じ頃の殿上人で、朝成は家柄の点では一条殿伊尹（これまさ）とはとても同じではございませんが、学才も人望もすぐれた人物でありましたので、朝成が蔵人頭になるべき順番がきた際に、またこの一条殿伊尹も、当然なつてよい人でしたから、その時に、この朝成の君が一条殿にこう申しあげました。

「殿は、このたび、蔵人頭におなりにならなくても、世間の人にとやかく悪いことは申しますまい。後々いつでも、お心のままにおなりになれます。ところで、このたび、私になりそこないますと、大変辛いことになります。そこでこのたびは、上申しないでいただけませんか」

「私もそう思っています。それでは、今回は上申しますまい」

とおっしゃったので、朝成は大変にうれしいこととお思いになりました。ところが、こともあろうに、伊尹はどうお気持ちが変わられたのか、問い合わせもせず、蔵人頭になってしまわれました。朝成はだまされたと、ひどく不愉快にお思いになり、それ以来、二人の仲はわるく過ごされました。そうこうするうちに、中納言朝成が、この一条殿伊尹に仕える家来に対して無礼なことをなしました。そのことで一条殿が、「思い通りに行かず先を越されたぐらいのことで、どうして何かにつけて、こうも我らに無礼を働くのだ」と腹をお立てになりました。それを聞いた中納言（朝成）は、「悪気はなかった、とことのわけも申しあげよう」と思い、一条殿に参上しました。ところで、昔の方は、自分より身分の高い方の所に参上した折には、先方から「どうぞこちらへ」との案内のないうちは、屋内にも上がらず、下に立っているのが礼儀でありました。この訪問は、六、七月のとても暑くて堪えられないところで、朝成は要件の旨を取り次ぎになさって、今か今かと中門に立って待っているうちに、西陽がさしかかつて、その暑さに堪えがたく、気が変になってしまうほどになりました。

「さては、この殿は、自分を焙り殺そうと思っているのだ。わざわざ出

かけてきたのも無駄なことになったものだ」と思うと、およそ憎悪の念が起るといった程度のことでは済みません。夜になったので、そのままここに立ち尽くして待つべきでもありませんでしたので、笏を握りしめ立ち去ろうとすると、ぼきんと音をたてて笏が折れたではありませんか。どれほど怒り心頭に発したことでしょうか。こうして中納言(朝成)は家に帰りましたが、

「この一族を永久に絶滅してやろう。もし男子なり女子なりがいようとも、栄進させまいぞ。これを気の毒だという人もいたら、それを恨んでやろう」などと誓ってお亡くなりになりましたので、一条殿の御子孫代々に祟る御悪霊とおなりになりました。(小学館新版『大鏡』p.184-186)

上掲の語りの場面は、藤原朝成と藤原伊尹との蔵人頭任官をめぐる争いの見事なエピソードである。日本人の「待ち心」にとって聞きどころだ。

時代は摂関政治華やかなりし十世紀末の藤原時代が舞台。朝成は中納言にまで昇るが、伊尹は摂政につき、二年ほどで死ぬ。その死は朝成の悪霊にとり憑かれたためとされる。菅原道真以来の怨霊譚である。

『大鏡』(1119年前後)と言えば四大鏡(『今鏡』『水鏡』『増鏡])の先頭を飾る歴史の語り物である。二人の翁、百九十歳の世継(よつぎ)と百八十歳の繁樹(しげき)が雲林院の菩提講の聴聞に出かける。「講師待つほどに、我も人も久しくつれづれなるにこの翁ども言ふやう (p.19) …… (歴史の長い長い語り) ……「講師おはしにたり」と、立ち騒ぎののしりしほどに (p.419)」(小学館新版『大鏡』)として、講師の出を「待つ間」が歴史の「語りの間」に仕立てられ、聴聞に来た周囲の人々の退屈しのぎの手立てにされている。

世継が見聞してきた百七十六年間の歴史を語る。まず、前段として文徳天皇から後一条天皇まで(五十五代から六十八代まで)の十四代の天皇をかい摘まんで語り、次に、左大臣冬嗣から道長までの摂関大臣二十人を順を追って、細かく語り聞かせる。その語りを傍らで書き留めるスタイルにしたのが『大鏡』である。無論、講師の出を「待つ間」にこんなに長く歴史を語れること

はあるまいし、そして歴史の語り手世継が百九十歳も生きるなどもフィクションである。この講師の出を「待つ間」は、大勢の人前で歴史を物語り聞かせるための便宜的な額縁取りにすぎないことが分かる。

朝成が一条殿（伊尹）より先に蔵人頭になりたかったことは言うまでもない。先を越されたことに加え、無礼を謝りに出かけた夏の暑い日中を西陽の傾くまで半日も待たされたことで怒り心頭に発する。一般に身分の高い人は低い人を待たせるが、ここまできると待たされたことが相手への怒りから怨念に変わる。

しかし、後の『十訓抄』（1252年）では朝成が待たされたことのために悪霊になったとは書かれておらず、伊尹の怨恨が原因だとされている。つまり、伊尹が中納言昇任のときに、朝成もなりたかったので伊尹について放言を吐き、それが根にあつて、朝成が大納言になりたいと摂政伊尹に昇進を申し出たとき、こんどは伊尹が「貴殿の昇進は私の心のままだ」としつべ返しして廷内に入ってしまう。それを怒った朝成が生き霊となって伊尹を呪い殺したとされる（小学館新版『十訓抄』pp.372）。朝成（917-974）の方が伊尹（924-972）より長生きするので、この方が史実に合っている。

『十訓抄』の編者より、『大鏡』の世継の語り口の方が迫真力があり、待たされることによる情念化の心髄を示して余りある。

また『大鏡』より後に成った『宇治拾遺物語』（84話）では太政大臣伊尹の急死は、堂を建てようとして墓を掘らせたなら、生々しい美人の尼の入った棺桶が出てきて、それが祟りとされる。いずれにせよ、伊尹の急死は当時話題を呼び、噂に尾ひれがついて語り継がれた。『大鏡』の語り手世継は菅原道真の落雷の怨霊に次ぐ怨霊として語っているところが興味を惹く。次章の情念の「待ち心」への前段をなす日本怨霊譚に欠かせない一話である。

三話：「夢中の浪人」

〈ここに大和田源太左衛門という浪人がいた。長いこと浪人生活で落ちぶ

れた身なりになり、埋もれ木のように花咲く様子もなかった。身のなりはては哀れな姿ではあったが、心意気だけは未だ衰えていなかった。仕官につこうとあちこち勤め口を探していた。ある時、つてを求めていつも目をかけてくれるお屋敷に出かけた。先客がいて源太左衛門が紹介された。客は親切にも相談に乗ってくれた。

「いい口があるからお世話しましょう。私の屋敷にも、ちと寄って下さい。ところで今日は残念ながら方々へ出かけるので暇がありません。来たる十一日には家に居るのでもし暇なら来て下さい、お待ちします。」とおっしゃるのを聞いて嬉しくなり、住吉神社前に二葉の小松を植えて千年を待つ心の思いで十一日を遅しと待った。



その当日、垢じみた黒羽二重(くろはぶたえ)の上に、時候はずれの肩衣(かたぎぬ)をかけきちんと礼服をきて出かけると、取り次ぎの者が出て来て、「内々にあなた様のことは主人から聞いております」と言っ、座敷に案内した。しばらくして、その家の主人が挨拶するには、「よくおいで下さいました。お待ち遠でありましようが、月代(さかやき)を剃りかかりましたので、しばらくお待ち下さい」と言っ、茶、煙草盆を出し、また

沢山盛った干菓子を浪人の前に置いた。

もとより浪人がかしこまっているときに、その家の六、七歳のざんばら髪の子供が障子をすっと開けて、浪人の顔を見ながら、その菓子を盗んで障子の陰で食べる。また来ては取っていく。浪人は心中、「さては気まずいことだ、ひもじくて菓子を食い荒らしたと思われるのもきわめて癪だ。脅してやろう」と思っていたとき、またやって来たので、目と鼻に手を当てて目口を広げて、「あかんべい」と言えば、その子は驚いて逃げた。また来たので脅し、二、三度したがまた障子を開けて来る。その子と思い、目口ひろげて、「あかんべい」と言えば、主人だった。主人はそのまま引き返して、「さてさて、あの浪人は気が変だ。すぐ帰らせる」とおっしゃる。

取り次ぎの者が来て言う。

「主人は用事があって外出します。まずは、お帰り下さい。かさねてこちらからお呼びしますと申しています。」

浪人は、さては、あかんべいをしたからだな、と思いながら仕方なくその座敷を立った。玄関口へ出ると、またかのいたずらの餓鬼が玄関の脇にいた。この子のために、仕官をしそこなったと思い、憎さも増し、また、「あかんべい」と目口を広げて脅した。見る人は皆、「いよいよもって気が変であることがはっきりした」と言った。〉（「夢中の浪人」 鹿野武左衛門『鹿の巻筆』〔1686年〕 岩波旧版『江戸笑話集』pp.180-182）

この「夢中の浪人」では「待つ」の三つの意味が使われている。最初のそれは外交辞令のそれであり、二番目は待ち遠しい千秋の思い。武士がかしこまって主人の出を待っている「待つ間」は「控えの間」であり、その襖絵の小松には、「千秋を待つ思い」の寓意が込められている。三番目が、主人がわざと「月代」だと言って、武士浪人を長いこと待たせること。さらに、主人が外出して要件が先き延ばしにされる。ここでも小松の待たせの寓意が込められる。その主人が浪人より格が上であること故の待たせである。

「武士は食わねど高楊枝」「浪人しても武士は武士」の心意気が裏目に出て、職探しが失敗に終わり、主人の出を「待つ間」が浪人の「へまの間」となる。

浪人の脇差しの時代からすでに町人の十露盤(そろばん)の時代へと進んだ江戸時代が背景にあり、武士の成れの果ての浪人が軽やかに笑い飛ばされている。

「浪人」の小咄——

〈雨の降る日、仕事のない素寒貧の浪人が来て、由緒ある門口でふところ手してつくねんと晴れ間を待つ。そこへ乞食が来て、「お余りもの下さいませ」

浪人苦り切って、「余らぬ」〉(木室卯雲『鹿の子餅』[1772年] 同上 p.355)

四話：一睡の夢の間——『金々先生栄花夢』

〈今は昔、片田舎に住む、生まれつき心やさしい金村金兵衛は、浮世の楽しみを尽くそうと思っていたが、貧しくてままならなかった。賑やかな江戸の都に出て、奉公口をさがし、番頭の地位について一儲けて、浮世の楽しみを極めよう、と思い立った。まず、開運名高い目黒不動尊を参詣したが、早、夕方になり、腹も空いたので不動尊門前の名物の栗餅を食おうと立ち寄った。

金兵衛が栗餅一膳頼むと奥座敷に通された。おりしも、出来合いの栗餅がなく、しばらく待っている中に旅の疲れで眠気を催し、そばの枕を引き寄せ思わず、すやすやとまどろんで、夢を見た。

どこからとなく駕籠を担ぎ、草履取り、小僧、手代、番頭を連れ、上下を着た年輩の先頭の男が威儀を正し申すには、

「そもそも私たちは神田に長いこと住む、和泉屋の主人清三(せいざ)と申すものの家来です。主人は年老い今年髪をそって、文(ぶん)ずいと名を

改めましたが、何しろ跡継ぎ一人いません。主人の信仰する万八幡大菩薩のお告げにしたがい、さいわいこのたび、出世を願っているあなたを跡目にと、お迎えに来たのです。」

と言って、不思議にも、無理矢理駕籠に乗せてどこへともなく連れ去った。

金兵衛は不審ながら、福德の三年目、棚から牡丹餅、これ幸いと打ち乗りゆく。着いた先で駕籠から降りるとそこは和泉屋であった。金銀を敷いた階段、瑠璃の戸、金銀ちりばめた屏風・襖、贅を尽くした大邸宅の座敷に上がった。さっそく、親子・主従の祝儀の酒盛りとなり、老翁清三は喜色満面で金銀財宝をみな譲り、名まで譲り、金兵衛は家督を継いだ。

家督を継いだ金兵衛はなに不足なく、だんだん奢りだし、夜毎に酒宴を重ねるうちに、昔と打って変わって、頭を月代(さかやき)に本田髷、黒羽二重(くろはぶたへ)、ピロードの帯、金モールの当世のシャレを尽くして外へ出かける。手代の源四郎、たいこ持ちの万八、座頭の五市の三人が心を合わせて遊興をそそのかす。

「内ではばかりの酒盛りではつまりません。吉原遊廓へお出でなさいませ」と源四郎が言って、吉原の遊廓に連れ出した。そこの「かけの」という女郎に馴染み、親の意見もなんのその、入り浸った。節分ともなれば、遊廓で豆は古いと、金銀を升に入ればらまく大尽ぶりを発揮した。人々は金々先生ともてはやした。

金々先生は吉原遊廓の遊びも尽くしたので深川の色里に出かけ、あらゆるシャレ遊びをしたが、受けが悪いので黄金の小判を振り撒いた。皆、金々先生ともてはやす。

雪の日も駕籠に乗らずに出かけ、そこの「おまず」という女郎にはまり、日参したが、その女郎は実は手代源四郎を間夫(=情夫)にして、金々先生の目を盗んで楽しんでた。それを怒った金々先生はその女郎と手を切った。

騙されたり、放蕩したりで、今や金も光らず、日頃平身低頭していた人も寄りつかず、とうとう品川の下品な茶屋女郎に通うほどに落ちぶれた。

「きのうまでは猪牙(ちょき)舟、四つ手の駕籠に乗りし身が、いまは股引にひより下駄、かわればかわる世の中じやな一。アア、いまましい」と独白する始末。

主人の清三(文ずい)は身代を潰した金兵衛の悪性を怒り、手代源四郎の勧めにまかせ、身ぐるみ剥いで昔の姿にして追い出した。

追い出されて途方に暮れ嘆いている金々先生は、栗餅の杵の音に目が覚め、起き上がってみれば、それは夢のことで、まだあつらえの栗餅は出来上がっていないかった。

「われ夢に文ずいの子となりて、栄花をきわめしもすでに三十年、さすれば人間一生の楽しみもわづかに栗餅一臼の内のごとし」と初めて悟り、おなじ田舎に引き込んだ。(恋川春町『金々先生栄花夢』[1775年] 小学館新版『黄表紙 川柳 狂歌』pp.15-28)

この話は謡曲「邯鄲(かんたん)」の江戸版である。

この『金々先生栄花夢』の序に、

「文に曰く、浮世は夢の如し。歎(よろこび)をなす事いくばくぞやと。誠にしかり、金々先生の一生の栄花も邯鄲のまくらの夢も、ともに粟粒(ぞくりう)一すひの如し」

とある。「一すい」は「一炊」と「一睡」の掛詞。

中国の故事「邯鄲の夢」が元祖で、「邯鄲の枕」とも言い、官吏登用試験に落第した廬生(ろせい)という青年が出世を志して都に上る途中、邯鄲というところで、道士呂翁(ろおう)という仙人に栄華が思いのままになるという枕を借りて仮眠する。すると、夢の中で次第に出世して富貴栄達を極めたが、目が覚めてみると、まだ黄梁(こうりょう=粟)の粥が煮えないわずかな間であった。夢に「うなされる廬生杓子でつつ突かれ」(岩波旧版『川柳 狂歌集』p.124)て、人生の栄枯の儚さを悟り郷里に戻った。

謡曲「邯鄲」はこの故事を題材にする。廬生は夢の中で帝位につき桃源郷（ユートピア）で五十年間栄華を極める。さらに、この能をパロディー化したのが恋川春町（1744-1789）の『金々先生栄花夢』で、桃源郷を遊廓に置き換え、江戸版に仕立てた。

いずれも、栗餅や粟粥の出来上りを「待つ間」の一炊を「夢の一睡の間」とすることで、夢の儚さを伝える。日本人が漢字の「夢」を「はかなし」と訓じたのは天晴れである。「人」の見る「夢」ほどはかないものはない。しかし、夢ほど現実を超えるリヤリティーを持つものもまたない。小野小町は「思つつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを」（古今 552）と詠い、夢想の中の恋を現実のそれより迫真力があるとした。

恋川春町の戯作は明快な滑稽で、ユーモアに溢れ、時代を風刺し、江戸の遊廓を舞台にしている。中世の神仏の夢告げの利生譚は江戸時代になると遊廓の色事のフィクションに取って代わり、もはや意図的になしえない神仏の超越的な霊夢ではなく、「浮世」の気ままな甘い夢になる。大金持ち（大尽＝商人）の手にしか届かない遊廓は、貧乏浪人や並の町人にとって手が届きそうで届かない距離にある。全くの幻想的桃源郷ではない。「浮世」は決して「憂き世」でない時代が、町人支配の江戸時代である。吉原遊廓は西方極楽浄土とも受け取られ、十万億土も遠いかなたの世界ではなかった。金銀さえあれば近い遊楽土であった。

井原西鶴は『好色二代男（諸艶大鑑）』を「大往生は女色の台（うてな）」で結び、主人公世伝の往生の来迎を遊廓の女郎たちのそれに仕立て、遊廓は西方浄土とみだてられている（岩波新版『好色二代男』pp.256）。

以上、四つの話では「待つ間」は時間の枠取りに過ぎなく、「試練の間」「語りの間」「へまの間」「夢の間」として埋め込まれる。しかし、「待つ間」は単なる空白の入れ物ではなく、その長短と内容が巧みに活かされていることに注目する必要がある。

二節 「待屈の間」のお喋り——『浮世床』

筆者は「待屈の間」の「待屈」は一瞬「退屈」の誤字かと見たが、その意義に感服した。式亭三馬(1776-1822)は客の順番待ちの「たいくつ」を「退屈」とせずに「待屈」としている点は単なる戯作的洒落に尽きない。「退屈」の原意は、『古語大辞典』(小学館)によれば、「困難にたいして、退き、屈する」の意である。現代的使用法とだいぶかけ離れた意味合いである。対して「待屈」の表記の方が真つ当と思える。つまり、待ち手が「待つ」ことに「屈する」の意に取れる。床屋なら、長い順番待ちを待ちきれず、それに屈して、別のことを求めて、その場を気短に立ち去るか、それともその無聊(ぶりょう)を、とりとめもないお喋りか何かで時間を潰すしかない。待ち時間は「待つこと」に屈すること、つまり待てない無情な時間であるからその始末に困る。それとして待てば待つほど、イライラした気分になる。

そして現代経営数学の「待ち行列論」の先駆がここに見られる。

戯作者、式亭三馬の『柳髪新話 浮世床』(1813-1814)は、その自序によれば髪結店(かみゆいどこ)で客の髪を結う「一個(ひとつ)待つ間の撥子(こしかけ)にて、おもひついたる趣向の一端」であり、つまり作者三馬自ら床屋に行き、髪結いの順番を待つ「待屈の間」で浮かんだ構想である(小学館新版『洒落本 滑稽本 人情本』p.247)。そして、三馬は床屋の丸一日を順番待ちするさまざまな江戸下層庶民のお喋りを活写することで物語を仕上げた。現今の読者にとっては江戸の風俗史の一端としても読めるが、「待ち行列論」とも受け取れる光景が描かれている。そして「待ち時間」の消化法の最たるものが、とりとめもない、脈絡のない「お喋り」であることも見事に活写されている。

式亭三馬は先に滑稽本『浮世風呂』(1809-1813年)を発表し、つづく『浮世床』では床屋の隣りに風呂屋を設定している。それは単に自己の作品のPRにしたことに尽きず、「待ち行列」を対比する狙いもあったかと思われる。

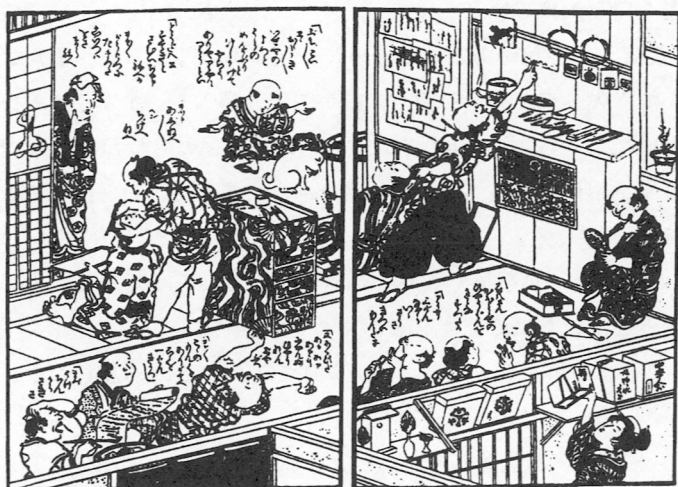
銭湯は待たずに入れるが、床屋は待たずには結髪はできない。前者は多くの人が一緒に入浴できる空間があるが、後者は「待ち腰掛け」で順番を待つ。そこに待ち行列が出来る。三馬がこの二カ所を選んだのは、当時の近世社会の世相風俗の最たる場所とみなしていたからである。そこには大衆化の走りが早くも見られる。その生々しい活写は、昨今の「待ち時間」の消化法にとっても、興味を惹く。

「待ち行列論」ではサービスの「窓口」を幾つ設けるかが経営戦略となる。「窓口」が少ないと行列が出来、待ちきれぬ客に逃げられる。逆に多くすれば人や空間が要る。最適の「窓口」を設定する数式の解を求めるのが、「待ち行列論」の数学である。“queuing theory”に「待ち行列論」の訳語を当てたのは日本人らしく天晴れである。「待ち行列」は組立ラインで待つ部品の列でなく、むしろ、気まぐれな私情の人の行列が問題である。それだけに最適な解が求めにくい。待つ人の心情を組み入れた、主客重合の日本人得意の造語と見たい。

『浮世風呂』の銭湯では、男湯と女湯の二つの入口（窓口）がある。銭湯は入浴の風呂と洗い場とがあり、二十人前後収容でき、一度に待つことなく入浴できる。また、男湯の二階には着物を入れる専用の棚があるだけでなく、碁や将棋ができる広間があり、長居ができる社交場である。一日の入浴者の総数は男湯女湯合わせて、八十人ぐらい。

対して、『浮世床』の一日に出入りする客の総数は三十数人で、主人鬢五郎（びんごろう）と弟子（剃出=すりだし）の留吉二人で仕事をこなしている。そこには待ち腰掛けがあり、待つ客は挿し絵に見られるように六、七人。退屈を紛らすためにさまざまな仕草をしている。女郎の手紙をこれ見よがしに読む男、それをひやかすキセルを手にした男、大欠伸する男、髭を抜く男、お喋りする二人、手鏡を覗く男。また、ただお喋りのために遊びに来る人もいるし、行商人も顔を出す。

お喋りは主人鬢五郎を中心に数人に限られ、出入りする客の毛色によって



話題が転々と変わり、一貫した物語の筋はない。『浮世風呂』も同じだ。

午前の仕事が終わる間際、先客の長六と短八が待っていて、長六の順番になり、長六が「はやく結つてくん」と主人鬢五郎(=びん)に頼むときに、無法者の竹と松の二人が床屋に駆け込んで来る。ときしも、床屋の裏窓から覗ける隣り部屋で、巫女のいかがわしい口寄せが始まろうとしている。

この間際の作者の設定が見事だ。昼飯の休憩時間になれば待ち時間が長いから竹と松は先着争いをする。その光景が圧巻である。

竹「鬢さん、今能(いゝ)か。

びん「チイ丁度よし

松「きてれつ、あり難(が)

竹「おれが先(せん)だ

松「べらぼう云や。おれが先へ首を出した

竹「おれが先へ敷居をまたいだ

松「首を先へ出した方が勝だ。てめへ、足を出したつて口がきけめへ。首

は先へ口をかけるは

竹「べらぼうめ。首があるけるものか。足があるくから先へまたげるは。

なんでも先へ来たものが勝だ。首から先へ這入(へゑ)る者はあるめへ

松「馬鹿ア云ふな。足は歩行(あるく)から先へ来たたらうが、首が先へ出ねへちやア用が足りめへ。おらア足であるいて来て、首を出してもものをいつた

竹「そんなら又、足を早く入れたが能はさ。おいらア足を先へ入て置て、しかうしてのちに口をきくはさ

松「いやらしい事をいふなエ。しかうしての何のと、お談義ちやアあるめへし

竹「べらぼうめ。お談義がそんなことをいふ物か

松「いはねへでどうするもんか。いはずは腕ずくで云はして見せう

竹「アレ見な。あゝいう強情者だから、對手(ゑへて)にならねへ

びん「コウへ両方とも強情一緒になる(=強情っばる)から能はな

長「松さん今此裏で巫女(いちつこ)が口をよせ居(て)るぜ。聴ねへか

松「こいつアおも黒(くれ)へ(=おも白い)

竹「おれもきくべい

短「死霊だ

竹「死霊だ。威勢が能ナ。コウはやくやらかしてくだつし。ちよび束(たばね)でいい

松「其(その)内おらア聴(きか)う torso へ行うとする

長「ヲイへ爰(こゝ)の内て聴(きけ)らア

松「きけるト。そいつア奇妙だ。ヘン太夫棧敷だナ。ありがてへ

(同上 pp.304)

床屋の鬢五郎は竹の結髪を始めていることからすると、先に足を出した竹に分ありとしたか。待ち行列での先着争いは現今でも変わらない。先客の髪結いが終わるまで待つことは「待屈」な時間潰しを強いられ、それもちよつ

との待ち時間ではない。裏隣で面白い口寄せが始まったので先着争いで勝った竹は気が気でなく、髪型は簡単な「ちよびつと束ねただけでよい」と言う始末である。

当時、床屋がはやった。寺門静軒は『江戸繁昌記』(1832-1836)の「篋頭舖(カミュイドコ)」で漢文調にこう綴る。

〈聞くところによると、床屋の株仲間は九百六十戸、四十八戸の組が出来ている。組でないものは二千余。合わせてその数三千戸。店の繁昌によって、株は二、三百金から千金の階層があるという。また、時には各家庭への出張出店で商売にした。〉そして、〈床屋の入口に順番待ちの待ち腰掛けがあり、来客を待つ(「(店の)一辺は胡床(=折りたたみ腰掛け)を安んじて以て来客を待つ」)。〉(岩波新版『江戸繁昌記』pp.100)。

また当時、髪型がオシャレ戦線の先端を走っていた。客の求めに応じて、〈銀杏マゲ、小マゲ、丸マゲ、チョンマゲ、本田、タバネ、ヒカへ、クズン〉と髪を結った(同上 p.101)。

そして順番待ちの退屈さも簡潔に叙景される。

〈早朝に店を開き、普段は午後八時までやっている。色々な髪型の、多くの人が来て順番を競う。親方は腰が曲がり、剃出の男は腕がだるく、だらんとなる。午前十時頃、一番、客が多くて忙しい。大欠伸する者、座って居眠りする者、人に背を向けて遊女の手紙読む者、髭を抜いて手持ちの鏡で見る者、歯を磨く者、煙草を吸う者、将棋を観戦する者、太閤記、三国志を読む者、順番を待って七、八人がお喋りする、猥雑極まる。野郎は遊廓の痴話。老人は廊通いの古きを誇る。近所のかみさんの美醜をあれこれあまさず品評する。遠方の売薬を舐めずにその効能を弁じ立てる。相撲の勝負を猛々しく論じ、歌舞伎の演技の巧拙を批評する。ある家の双子、それがしの心中事件、噂を飛ばし合い、一大事変の伝達は早飛脚より速い。談論が昂じれば、儒教、仏教、神道、心学に及ぶ。神道に似て非なる富士講さえ話題となる、社交場である。〉(同上 p.102)

『江戸繁昌記』は、『浮世床』より二十年後に書かれていて後者を参考にして
いる節々が多く見られる。順番待ちの、つるつるの禿頭の、人を煙に巻く
自称似非学士の老人が待ち客と論談する。その床屋の「待つ間」を簡潔に叙
景している。その叙景の手口は『浮世床』の趣向と同じであるが、題材を中
国の儒教、故事、仏教、日本の神学、国学、俳句、茶道に取り、漢文調の会
話のやり取りにして、戯作に対抗した学問的な批評的叙述にしている。『浮
世床』と較べて堅苦しく、笑いを誘わない。

ところで作者三馬は順番待ち行列の様子を描くため、主人公鬢の言葉やト
書きを、付けたりのように随所に入れているところが注目される。

「まだ隠居さんが一ッある」とか、「まだ五ッありやす」とか、「まだ間に
二ッ三ッございましたが、お出なさんねへから能(よう)ございます」とか、
「おれが番か。ありがたい。やつとの事でお鉢が廻って来た」とか、「まだ百
(いつそく)五六十ある。コレ内帰(けへ)つてさう云へ。旦那に、透(すき)を待
ていちやア一日埒(らちア)明ねへから、こつちへ来て待てお出なせへと」と
か、「最(も)うお三人ありますから、すぐに来てお出でなさいトさうぬかせ」
とか、とお喋りの活写の合間あいまに点描している。そして、作者は最初と
最後の方で、ト書きを書き入れ、出入りの客の人数や結髪の様子は定かに書
かないと、うすらとぼけている。

早朝の馴染み客が出入りしたところで、

「作者曰「これより以下幾人客あるとも、月代をそり、髪を結び、順々に下
剃りにまはる事など、委(くは)しく書くべけれど、わづらはしければここ
にはしるさず。さまへ物のかたりある中に、おのへかわりへに髪月
代する事とおもひ給ふべし。且、くしけづらずしてはなしに来る人もあ
り。あるひは毎日あそびどころとして入来る人もあるべし。そのたぐひ一
いちにはしるさず。穿さくのくはしき御見物ならずとがめ給ふな」(小
学館新版『洒落本 滑稽本 人情本』p.264)

と、ト書きを入れ、夕方の店仕舞いする最後のところで、

「何人なるか作者もしらず。御見物のおもひへに註をくだし給はゞ、なほ興深かるべし」(同上 p.352)

と記入して、待ち行列を作者は常に念頭に置いている。

それは三馬にとっては、剃る様子や髪型はいつでもよく、待ち客同士の、客と主人鬢五郎とのお喋りのやり取りという叙法を優先しているからだ。『浮世風呂』ではト書きで石榴(ざくろ)口から入る様子や流し板で手桶の水を掛ける様子が点描される。

客の待ち行列は作者三馬の叙法と密接不可分である。『浮世床』は早朝から夕方までの床屋の丸一日を、馴染み客の会話の連続で描き上げている。喋られた通りに活写する会話形式は、自然時の対位法的叙法であり、ちょうど待ち行列の順番通りに叙景する。床屋に登場する毛並みの違った客ごとにお喋りの話題が変わり、物語の一貫した筋がなく、いわば、細切れの話題を連続と活写することを特徴とする。

「待屈の間」をお喋りで消化する方法を三馬は弁えていた。お喋りを落語的なオチや滑稽な言葉のやり取りにし、読者を笑いに引き込む。読者を「待屈」させずに読了させる構成にする。その手法は、ちょうど現今の、車中の乗客が、目的地に着くまで、大衆週刊誌の種々様々な細切れ記事を読み切りながら時間を潰すのと同じである。そこには小説のような一貫した物語の筋は一切ない。

「時間潰し」を西欧語では、“kill time”とか、“töten die Zeit”とか、“tuer le temps”とかと表記するが、日本語では「時間殺し」などの殺生な言葉は使わない。退屈な時間を何か別の事をして、「時間を潰す」とか、「暇を潰す」とか、あるいは「時間をこなす」という。「潰す」とは形あるかさばるものを押しつぶして小さくする。「こなす」とは粉々にするの意味である。つまり、退屈という邪魔者を「殺す」のでなく、待ち時間を行く手を阻む目障りな「無用の長物」として、〈物〉的に表象し、それを細切れにする手合いである。それに取って替えて「言の葉」の集まり、つまり、とりとめもな

い、脈絡のないお「喋」りで埋め尽くしていく。これは「待ち時間」を〈モノ的時間〉から〈コト的時間〉に替える手立てであって、〈言〉の組立の方が〈物〉のそれより裁量のはるかに自由である。女性の乗客がひっきりなしに喋っている情景がよく見られる。それは『浮世風呂』の女湯に描かれる女たちの長お喋りと瓜二つである。

三馬は床屋の丸一日を、とりとめのない脈絡のない滑稽なユーモアあふれるお喋りの細切れの断片の数々で塗り潰した。ここに戯作たる所以がある。現今の乗客なら、大衆週刊誌の細切れの雑記事を読むことで、「退屈な待ち時間」が消化できる。しかし、本当に消化できるかは疑問である。大量に読めば、飽きが来て、下痢を起こそう。

江戸も末期となれば読者の大衆化が進み、一連の戯作——読本、黄表紙、滑稽本、合巻、人情本、洒落本が挿し絵付きで普及する。先の黄表紙の『金々先生栄花夢』もその類である。『浮世風呂』も『浮世床』も現代の大衆週刊誌の先駆けであろう。乱雑な、卑猥な記事といい、セクシーな写真といい、よく似ている。

最近、理髪屋が「ただ今、待ち時間無し」の札を出し、客呼びしている街の光景が目立つ。それは「紺屋のあさって髪結ひたつた今」の江戸川柳と変わらない。しかし、「明日でも剃てくれると飛車が成り」とか、「つみぎはになつて髪結せつくなり　〈前句〉ならびこそすれ」とかの悠長な待ち時間の光景は見られない。予約制もあるが、順番待ちの大半は大衆週刊誌かスポーツ紙を読んでいるか、辺り構わず携帯電話でお喋りするか、人をはばかりで静かにメール交換して時間を潰す光景が目立つ。「待ち時間潰し」は容易でない。

待ち行列に割り込む「時間泥棒」——

スキー場のリフトや列車の乗車の待ち行列に割り込む若者や老人の無作法者は、跡を絶たない。並ぶ者すべてから、時間をかすめ取る「時間泥棒」で

ある。先頭に割り込めば、一番先に待っていた人が一番時間泥棒に遭う。最後尾の人はさほどでないが、かすめ取られた時間を皆足し算すると膨大になること請け合いだ。割り込みの人が車中の座席をとれば、残りは立ちん坊で、まさしく立ちん棒となる。待ち行列の人よ、閻魔大王のように怒鳴れ！

「こらっ！ 割り込むな！ 時間泥棒！ 地獄行きだぞ、そこで盗んだ時間の分の二、三倍長い責め苦を受けるぞ」

閻魔様のような人はごく稀だ。

「時間泥棒」を防ぐ手立ては公德心の育成を待つしかないのか。こちらの時間はもっと時間がかかるが、いかがせん。

三節 「待つ間」の江戸笑い話——『本朝二十不孝』

一話：「芝居大夫もとの日待」の賭博

〈歌舞伎座のある木挽町の座元で日待ちがあった。あまり夜長なので少し退屈紛れのなぐさみに賭博を始めた。一人が胴元になる。有名な歌舞伎役者が負けに負けて、その後はそこらじゅうから借金までして、また全部負けた。癪にさわって「こうなった上は仕方ない、これを張ろう」と言ってお抱えの若衆役者まで呼び出して賭け物にした。しかも、この抱え役者は人気役者の若衆であった。

賭博の相手「いやこれは迷惑でござります。あまり蟲眞の客もござらぬで」

役者「いや、捨て値でも三十両の値打ちがあるが、お前は受けまいか」

賭博の相手「このような大バクチはいやでござる」

役者「さてさて、わしは宵からいくら取られたとお思いか、これが最後だ、全部だ」

側の人「これはいくらなんでもまずいござる。二つに割って張りなされ、宵から見ているに先に札を張った人には運がござらぬに。あんたが本当は勝ったのにお負けになった。二つに割れば、たとえ親によい目が出

て、頭が取られても、尻は残ります。尻さえあればいつでも客を取ることが出来ますが」(鹿野武左衛門『鹿の巻筆』[1686年] 岩波旧版『江戸笑話集』pp.218)

庚申待ち、月待ち、日待ちでは前夜から潔斎して日の出を拝する。その間退屈を紛らすために博打、歌謡、飲酒、連歌などして夜を徹する。日待ち行事は、三、十、十三、十七、二十三、二十七日。正月、五、九月の奇数月のそれが特に重んじられた。日待ち行事は日の出の礼拝を口実に徹夜の遊興と化し、賭博は町人の退屈しのぎの真剣な遊びであった。賭事ほど夢中になるものはない。

当時、歌舞伎の座元が若衆を抱え役者として使っていたが、男色が流行っていて若衆役者が男色を売っていた。観客が若衆役者を買った。念者(=男色関係の兄貴分)と若衆との男色の話や、寺の坊主と小僧とのそれは、多くの江戸の作者の題材となった。

「あまり鼯鼠の客もござらぬで」とは、この若衆役者を男色の相手としては鼯鼠がないを含意し、「お前は受けまいか」とは、勝てばその若衆の念者になれるを含意している。二つ割とは、その若衆の上半身と下半身のことで、負けても尻が残り、男色の商売は続けられる。これがオチだ。

二話：「掛乞(かけこい)」の撃退法

〈大晦日の夜なか時分、かけとり(=掛け売り代金の集金)、財布を肩にかけ、

「お仕舞(=年末の清算)はできましたかの、御亭主。昼の約束の通り、外は仕舞ふて来ました。さつきの残りをはらふて下さい」

「ホイ今やませう。ちつと待つてゐさしやい」

と、いさいかまわず帳合(てうあひ=収支の帳簿付け)してゐれば、

「コレもふ追付(おつつけ)八つ(=間もなく夜中の2時)になります。七百(=錢七百文)ばかりの事じやに、ちよつと出してくだんせ」

「ハテ、追付わきからくる所がある。もちつと待たしやい」

「是はしたり(=あきれた)。それが待ていられるものか。そんなら春でも
きませう」

といふを、亭主、

「イヤ〜暮迄の約束じやから、今夜はらつてしまいます。そこら廻つて
から来さつしやい」

「アレまだあてこともない(=とんでもない)。あればかりに(=あれっぽっち
の少額の七百文を)何度とりにくる物だ。春のことにしませう」

「イヤ〜ことし中にはらわねばならぬ。ぜひとも待つていさつしやれ」

「イヤ春とりに来ませう」

「イヤ〜今夜払わねばかへさぬ」

と、互ひにあらそひ、声高になれば、女房そばから、

「これこちの人、あれほどにいわつしやるに、春迄のばして進ぜさつしや
い」(小松屋百亀『聞上手』[1773年] 同上 pp.405)

あら玉のとしたちかへるあしたよりまたれぬものはかけとりの声

(岩波新版『狂歌才蔵集』p.106)

懸取(かけとり)はいひわけまたぬ年の夜ぞかし

(同上 p.233)

三話：「待てど暮せど音もなし」

「田舎からとまり客があるに、居風呂(すえふる)をたてゝいれられしに、
此客風呂に入りて半時(=1時間)ばかり音も沙汰もなし。亭主きづかひに
思へど、「はやく上られよ」ともいひにくゝ、湯殿の口にたゝずみて、

「ゆるりとお入なされ」

といへば返事するをきゝ、まづ落着きて居るに、待てど暮せど音もなし。
又も不審に思ひ、又々、

「ゆるりとお入なされ」

といへば返事のごゑあり。やゝ久しくして、海老のごとく赤くなりて風呂より上る。つれの客が見て、

「いかう長湯を召させられた」

といへば、

「ハテ御馳走ではあらうが、湯を強いられるもせつないもんだ。」(大田南畝〔蜀山人〕『鯛の味噌津(みそず)』[1778年] 同上 pp.441)

田舎者が「ゆるりとお入なされ」の常套語をそのまま真に受け、ゆで蛸になったのがオチ。次は同じ作者の狂歌——

ねてまでどくらせどさらに何事もなきこそ人の果報なりけれ

(「蜀山百首」94 岩波旧版『川柳 狂歌集』p.469)

「待てど暮らせど……なし」が常套語で、悪いことの生起が普通は想定されるが、ここでは良いことの断定となっている。一ひねりしたところが蜀山人の本領。

四話：「敵討の化物」

〈花の咲く三月半ば過ぎ、名高い浅草観音寺に貴賤男女が参詣し群衆をなす折り、深編み笠をかぶり派手な大小の刀を差した立派な侍がいた。そこへ向こうより十六、七歳の立派な衣装を着た美貌の若衆がやって来て、深編み笠の侍に向かい、

「ヤレ待たれよ。貴殿は篠田郡右衛門であるな。わしは清水惣左衛門の倅の宗次郎だ。父惣左衛門をよくぞだまし打ちに殺して逃げたな。これによって敵討ちのため、お暇を頂いて貴殿のゆくえをあちこち探し、今日めぐり逢えたことは、仏様の大慈悲によるものだ、待ちに受けること、優曇華(うどんげ、三千年に一度咲く)にめぐり遭ったも同然だ。さあ勝負だ。父の敵は逃さぬぞ」

と声を掛ければ、その侍は編み笠を取って、

「いかにも覚えあたる一言だ、逃げ去る侍ではない。ぜひとも勝負しよう。持つべきものは子であるはな」

と神妙にほめ、

「今ここで、打ち合いを果たすべきだが、わしも今は主人に仕える身、今日は主人の用事で出て来たので、今日の敵討ちは暫く待ち給え。主人の用事が済んだら今日中にお暇を頂いて明日、高田馬場で落ち合い、まともに討ち果たそう、嘘は申さぬ」

と、言い訳を理を尽くして申したので、若衆も聞き入れ、

「ぜひ明日高田馬場に落ち合おう」

と確約して左右に別れた。これを見ていた群衆は皆、

「ヤレ明日は高田馬場で敵討ちがあるぞ」

と江戸中にふれ廻った。翌朝早くから何千何万人の老若男女が高田に寄り集まった。もう敵討ちが始まるとばかり、待ち受けていたが、昼も過ぎ夕暮れになっても一向にその様子もなかった。さてはだまされたかと群衆が散り散りに帰るが、物見の大半は懐の財布、印、巾着、脇差しの小刀、刀の組み紐などの何か一品が盗まれなかった人はいなかった。これは、巾着切り(=スリ)が企んだ事件に相違あるまい。誠に賢い人もひっかかるのがおかしい。敵討ちに化かされた人が多いのだ。今年の四月にも本郷桜の馬場で敵討ちがあるとて、江戸中から群衆が集まったが、影も形もなかった。またまた化かされたのだ。かくて賢い今の世の人も、たびたび化け物に出逢うことこそみっともないと一笑した。(馬場文耕『当代江戸百化物』[1758年] 岩波新版 pp.13)

当時、すでに、敵討ちは武家諸法度(1683)で禁じられ、加担者は本人よりも重罪とされたが、届け出で許可された例もあった。そうした時代の一大会イベントである。この化け物とは群衆心理を掻き立て、今か今かと待たせておき、他に気を取られている物見高い「待ち心」の隙を狙って稼ぎまくるスリ集団である。

五話：弥次さん湯船で泊め女を待つて

北八「サア弥次さん、湯にはいらぬへか

女「あなたおめしなさりませ

弥次「イヤでへぶ（=大分）、あだなやつら（=色っぽい女）がちらつくぜ

北八小ごへに「今のやつを風呂場で、ちよびと契つておきは、はやかるふ

弥次「ソリヤほんとうにか。どふして〜

北八「おれが湯にいつてゐる所へ、おぬるくはござりぬませぬかといつて、

うせおつた（=やって来た）から、すぐにそこで約束した。まだひとりいゝ

年増が見へるから、おめへ湯に入てまつてゐなせへ。大かたそこへくる

にはちげへはぬへから。そこでくちをかけるがいゝ

弥次「しやうち〜。ドレ入て来やせう

ト弥次郎はゆにいる 又ひとりあきん人

「ハイ焼酎は入ませぬか。白酒あがりませぬか

北八「ヲットそのしやうちうを少しくんな ヲト、、、よし〜

トちやわんにつがせて ぜにをはらひ、かのしやうちうをあしにふきかけ

「よし〜、これでくたびれがやすまるだろふ。どなたも御めんなさい。

ヤア急いとこな

トよこにねかける。此内弥次郎は湯に入て、女のくるのをまてども〜、いつかう

に来らず。手足のゆびを一本〜にあらひて、しばらくのうちまちぼうけとなり、

あまりなが湯をしてゆげにাগり（=のぼせ）、ふろばのはめ（=壁の張り板）にもた

れてぐにやりとなりゐる 北八はあまりに弥次郎がながゆなるゆへ そつとふろば

へのぞきにきたり このていを見て

「ヤア〜〜弥次さんどふした〜 コリヤたいへんだ

ト弥次郎がかほに水をそゝぎ

「弥次さん〜

弥次「ヲ、〜ウ、、、ウ、、、ー

北八「いゝか〜 どふしたのだ〜

弥次「どふした所か。手めへおれを、急らいめにあはした

北八「なぜ〜

弥次「ゆに入ながら、もふ女がくるか〜とおもつて、あんまりながゆをしたから

北八「それでゆげにあがつたか。ハ、ハ、ハ、ち急のねへはなしだ

弥次「手めへのおかげで、まだ足がひよろ〜する

(十返舎一九『東海道中膝栗毛』〔1802-1808年〕小学館新版 pp.246)

弥次、北八が伊勢参りに向かう途中、四日市のはずれで客引き女の言うまに安宿に泊まる。宿の女はまた、春をひさいだ。北八が風呂をもらい湯から上がったところの、戯作の一場面である。『東海道中膝栗毛』も先の『浮世床』のように、対位法的会話で全編が綴られていて、伊勢参り道中の当時のPR版ともなっている。弥次、北八のお喋りだけでなく、出逢いの人物との対話が主となる。この点で馴染み客とお喋りに終始する『浮世床』とは異なる。

六話：「死に一倍の借金千両」——『本朝二十不孝』

〈由緒ある家の跡継ぎ笹六は、親から受けた財産を遊里で七年間で使い果たし、さらに親が老後にとっておく隠居銀に目を付け、これを抵当にして借金する手立てを考える。

放蕩息子笹六は遊里で遊ぶため、幹旋屋を介して貸し手を捜す。歳は二十六歳なのに老けたなりにして三十一歳と偽り、よって親も本当は五十歳なのに先のない七十歳近くの老人だと偽る。高利貸屋の奉公人が笹六の父の年格好の偵察に来て、あまりに元気な親なので十年や十五年は生き延びると見て貸し渋る。でも笹六は父はめまいの持病持ちで、肥って中風の気があり、せいぜい寿命は五年か三年だと言い、場合によっては別の手で寿命をちぢめるとほめかし、笹六の太鼓持ちも自然死を待たずに片づけると口添えて、無理矢理に金千両を借り出す。利子や仲介料を差引かれ、

五百両足らずを借りることになる。

早速それを持って太鼓持ちを連れ、意気揚々と吉原の遊郭に出かけるが、これまでの揚げ屋の請求書、揚げ代、茶屋への心づけ、二階の普請などとかで、残った金はわずかの一両ほど。出かけた皆は啞然として次々に帰る始末。残った下男は一人だけで、遊女との遊びもままならぬうちに、もう帰宅の時間ですと笹六を家に連れ帰る。

さてそれからは親はぴんぴんしているので隠居銀で借金は払えない。親の自然死を待ちきれなく、そこで笹六は多賀神社に参拝し親の寿命が短くなるように祈願するが、この神社はもともと寿命神であって逆に寿命が延び、さっぱり効き目がない。そこで修験者を頼み「七日の内にと」調伏させると父はめまいを起こす。笹六はうれしく、かねてから作っておいた毒薬を取り出し、「気付け薬」と偽って口移しに飲ませようとするが、誤って試飲してしまう。手当ても甲斐なく、目は開き、髪はちぢみ、身体が五倍も膨れ上がり、見るも哀れな死様となった。

息を吹き返した親の方はそれとは知らず息子の死を嘆く始末。その親は死なず、高利貸屋もすぐには取れずじまいとなる。) (小学館新版『井原西鶴集』(2) pp.157)

井原西鶴(1642-1693)に『本朝二十不孝』(1686年)という当代の親不孝話がある。その巻頭の「今の都も世は借物、京に悪所銀の借次屋(かりつきや=幹旋屋)」の話である。

当時、「死に一倍の借金千両」という、親が死んだら三日以内に二千両にして返済する超高利貸屋があった。借りてすぐに親が死んだら借り手は二倍にして返さなければならない。「一倍」とは同額を加えての意味で、今の二倍のこと。逆に親が十年以上も長生きすればその利子はただみたいなものになり、貸し手の損となる。したがって元気な親には貸さないのが当然。

西鶴のこの話を前提にすれば次の当時の川柳はたちどころに分かる。

前句——「待てば久しやへ」

「若き親しらで金借す死一倍」(小学館新版『黄表紙 川柳 狂歌』p.291)

西鶴の話と似た話はすでに『今昔物語』(巻14-38「方広経を誦経した僧、海に落ちて死なずして、帰還したこと」)にある。あらましこうだ。

〈高利貸を商売にして妻子を養い、日夜、方広大乘経を読む僧がいた。その一人娘を嫁がしその婿も同居していた。婿が地方に赴任することになった。その準備のために婿は舅の僧から「一倍」増しで返済する高額の金を借りた。一年で元本は返せたが利子分は返せなかった。舅は婿に返済を強く迫った。婿は舅を殺すことを思いつき、舟で海に連れだし船頭と計らって突き落とした。妻には、「お父さんは舟から落ちて海底に沈んだ」と嘘をついた。ところで、舅の僧は方広大乘経を誦した功德で浮かび上がり、漂流しているところを他の舟に助けられ、家に帰った。ちょうどその時、自分の葬式が営まれていた。驚いたのは婿の方でどこかへ逃走した。舅は僧の身としてはこの悪事を恨まなかった。〉(小学館新版『今昔物語』(1) pp.496)

この編者は「婿の殺すも邪見なるべし、又舅の金を責めるも不善の事なり」と結んで、僧の身としての高利貸しの生業を批判している(同上 p.499)。

西鶴の先の笹六の小咄は、さしずめこの話の江戸版である。

江戸元禄時代は商業活動が活発で「地獄の沙汰も金次第」のご時世、遊廓は町人の現世の極楽の場所であり、遊廓に大金をつぎ込む商人の蕩尽の話は数々で、なかでも親の長い蓄財を数年で蕩尽して破産する放蕩息子が話材となる。笹六の話はその一話。西鶴は息子の親不孝の江戸版をユウモアたっぷりの筆致で描いた。

しかし、「死に一倍の借金千両」の現代版ともなると、もはや、笑えない。高額の掛け金の保険金詐欺である。親の自然死を待たずに殺し屋に依頼するなどの昨今の手口に到っては空恐ろしい。

それにも増して恐ろしいのは、親がわが子を自分の手で殺して数億円の保険金を詐取する犯罪である。これには言葉もない。「地獄の沙汰も金次第」の閻魔大王とて、この数億円で放免とはいくまい。五逆(母殺し、父殺し、阿

羅漢殺し、教団破壊、仏の毀損)を犯せば無間地獄に落ちるとされるが、このごとき新手の犯罪に閻魔大王といえど、どんな責めを発案すればよいのか分かるまい。

次章で述べるように、奈良平安朝の雅心の「待ち心」は、源平の合戦後には情念の「待ち心」へと変貌する。江戸時代に入ると「待ち伏せ」による親や主君の敵討ちへと強められ、現代では「待つ間」は「待つ魔」となる。

(つづく)